

害虫発生概況

冬季は日照時数は少なかったが、高温、多雨のいわゆる暖冬型で、しかも、続く春季も割合に気温は高目に経過したために、害虫類にとつて、越冬から春季発生までの条件は極めて好都合に運んだ。そして、6月に南九州で一時気温が低目であつた以外は一般的に、高温、少雨、多照のまま夏に入り、台風による降雨を除いては雨も少く、残暑のきびしい秋季を迎えた。秋季おそくには、気温は低目であつたが、きびしい寒さに見舞われず、害虫類は越冬に入る条件にも恵まれ、気象条件の上から、全般的に、害虫類の発生加害に都合のよい年であつた。

サンカメイチュウ・ニカメイチュウは、暖冬型の影響をうけて、発育は進み、福岡県や山間地帯を除いて各地共15~30日も早く初飛来が見られた。サンカメイチュウは越冬虫も多く、発生分布は更に拡がり、発生量も多く南九州では、各地で被害を出した。ニカメイチュウの発生量は、2化期に南九州の早期栽培の混作地帯で、やや多く発生したが、前年同様に、常発生地帯や一部の地方を除いて、1・2化期とも極めて少発生に終つた。

ツマグロヨコバイも初飛来が15~30日早かつた。休閑田の生息密度は高く、暖かい気候は、分散移動を助長し、ために、早期苗代、普通期苗代への飛び込みが極めて活潑で、侵入増殖がおこり、その頃から大分、熊本、鹿児島県では、しばしば異常飛来を見た。その後、ニカメイチュウの1化期防除によつて併殺されたところもあるが、多くの圃場では、夏季の生息密度は依然として高く、秋季の直接吸汁加害のおこることが心配された。したがつて、媒介する萎縮病・黄萎病も多く発生した。秋季に入つても天候に恵まれ、圃場密度は高目で、越冬虫も多いものと予想された。

ヒメトビウンカも同様に、初飛来は非常に早く、越冬虫密度も高い地方が多かつた。鹿児島県では4月末には異常飛来の現象を記録するほど、全般的に早発でしかも多発生の傾向が見られた。したがつて、苗代期や本田初期の飛び込み数や生息虫も多く、媒介するしまはがれ病と宮崎県ではくろすじいしゆく病の発生が多かつた。しかし、夏を過ぎる頃から雑草草生地に移動したため、本田には少なくなつたが、このような雑草地では越冬虫密度がかなり高いと思われる。

セジロウンカ・トビイロウンカも初飛来や初発見が約1月も早く、セジロウンカは、北九州では早期稲や早植田または山間地に早くから生息虫が見られ、天候条件から多発生が予想され、7月後半には、福岡、長崎、大分県や宮崎県のとくに山間地帯では多発生したため防除が行われた。しかし、一般には、圃場生息虫少く、ニカメイチュウの1化期防除による併殺効果も手伝つて、平年以下の発生にとどまつた。トビイロウンカは夏季に入つて、各地で生息密度が高くなり、秋季には多発生し、南九州では、台風のための倒伏した稲では被害が加重されるなど、坪枯れ被害を多く出した。

イナズマヨコバイも早発、多発生の様相を呈し、大分、福岡県では、5・6月に異常飛来や多発生を記録し、また秋季に再びトビイロウンカと混発して局地的に多発生した。

イネヨトウも越冬虫密度が高い上に生育も早く、大分、宮崎、鹿児島県では、春季早くから多発生し、ややおくれで福岡、熊本県にもおよび、秋季まで加害が見られた。

アワヨトウは大分、宮崎県では、早春より牧草性草地に多く発生し、夏季には福岡、長崎、熊本県でも、局地的に多発生が見られ、熊本県では加害が秋季まで続いた。

ハスモンヨトウは夏季から秋季に、長崎、鹿児島県で局地的に多発生を見た。

ナカジロシタバは長崎県では春季に多発生したが、ひどい加害は、夏季から秋季に、長崎、宮崎、鹿児島県で記録され、ハスモンヨトウと混発して加害したため、被害は一層ひどく現れた。

フタオビコヤガの初飛来も極めて早く、発育条件も良かったために、福岡、熊本、宮崎県では夏の世代の発生が特に著しく、被害を出したところもある。

イネツトムシも熊本、宮崎県で6月に、主として早期稲に、8月に入つて大分県でも多発生した。

カメムシ類は一般に越冬虫と春季の圃場生息虫が多く、ミナミアオカメムシばかりでなく、クモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ、クロカメムシが、熊本、宮崎、鹿児島県では春季水稻に混発多発生した。鹿児島県では秋季にミナミアオカメムシによる大根、白菜、かんらんの被害が大きかつた。

キリウシガガンボは、福岡、佐賀、長崎、大分、熊

本、鹿児島県で、稲作初期に、例年になく多発生し、特に常発生地や中山間地に多かつた。

麦作害虫では、ムギトビムシモドキが福岡県で秋季少雨のため発芽期被害がひどく、アブラムシ類、ムギダニは長崎県で、ムギのハモグリバエは長崎、熊本県で多目の発生を見、被害を出したところもあつた。

そさい類害虫では、ヤサイゾウムシが福岡、宮崎県で、コナガが、長崎、大分、鹿児島県で大根、かんらんひどく加害し、秋季には、大分、鹿児島県ではひどい被害をうけた。他に、エンドウハモグリバエが佐賀県に、アブラムシ類が秋季に長崎、大分、鹿児島県で割合に多く発生した。

その他、局地的ではあつたが、ニジウヤホシテントウ、テントウムシダマシが長崎、大分、熊本、鹿児島県のナス、ジャガイモ畑に多発生し、イモコガが、長崎、大分、鹿児島県で、タネバエによる水稻被害が、熊本、宮崎県で、イネカラバエが、福岡県山間地方でウリバエの被害が大分、熊本県で見られた。

また、大分、熊本県ではハンノキクイムシが栗林に異常発生し、ひどい被害をうけた。

果樹害虫では、吸収性夜蛾が宮崎、鹿児島県で、秋季に異常発生し、ヤノネカイガラムシ、ミカンハモグリガ、サビダニ、ハダニが長崎県で、局地的に多発生し、それぞれの地方でかなりひどい被害を出した。

病害発生概況

麦類の病害では、出穂期ごろから高温多雨であつたので、アカカビ病が早くから発生し、各県とも発生多く（昨年より少ない）、とくに裸麦の被害が甚しかった。北部九州では5月の晴天により後期のまんえんはやや抑えられたが、南部九州（とくに鹿児島）では昨年に引き続き大発生となつた。同様に4月の高温多湿と暖冬のためウドンコ病の発生も早く、平年並～やや多かつたが、まんえんはゆるやかであつた。サビ病類のうちでは、クロサビ病が一般に小麦にやや多く、キサビ病が長崎で小麦にやや多かつた程度であつた。

菜種キンカク病も開花後期からの高温多雨のため全般に多く、南部九州では昨年を上まわる甚しい発生となつた。そ菜類でも上記のような春先からの気象条件によつて、たまねぎベト病、うり類ベト病、エキ病、キンカク病、トマトエキ病、いちごウドンコ病などが多発生し、また果樹類では、みかんソウカ病、カイヨウ

病、なしアカホシ病、コクハン病などの発生がやや多く、ぶどうオソグサレ病は少なかつた。

早期稲では葉イモチが、苗代後半期に高温多湿であつたため早く発生し、本田でも引き続き多目であつたが、中部以北では後期の進展が著しくなかつたのに対して、宮崎沿海地方、鹿児島県南地方（とくに種子島など）では後期まで多発した。穂イモチも同様に中部以北では出穂期ごろからの高温多照により平年並～少発生であつたが、上記南部地方では出穂期の雨、出穂のおくれ、感受性品種の作付などが原因となつて発生が多かつた。モンガレ病は生育後期の高温によりやや多い発生で、シラハガレ病は鹿児島県では7～8月の大雨による本田浸水と8～9月の台風の影響で早く発生し、面積も大きかつた。ウイルス病のうちでは、イシユク病、シマハガレ病が熊本で、オウイ病が鹿児島で多発した。シマハガレ病についてはヒメトビウナカ越冬虫の活動開始時期の早かつたこと、オウイ病では春のひこばえが多く、生育初期のツマグロヨコバイの活動開始が早かつたことなどが多発の要因としてあげられる。

普通稲のイモチ病では、葉イモチは山間部の一部を除いては一般に苗代では少～並の発生で、本田でも少なかつた。しかし、南部九州（とくに鹿児島県南部）ではやや多～多発生であつた。これは中部以北では、5月（苗代前期）の好天気と苗の順調な生育により、苗代での発生が少なく、それが本田への持ちこみを少なくし、さらに7月以降の高温多照が幸いしたのに対し、南部では苗代期の多雨、7月後半の低温多湿（鹿児島）であつたことが、発生をうながしたと考えられる。穂イモチは、出穂期の好天気によつて全般に少なく、枝梗イモチが9月後半～10月の雨、南部地方の9月の台風などによりやや多かつた。これには晩期追肥および感受性品種の普及も関係しているようである。シラハガレ病は苗代～本田初期の浸冠水少なく、7～8月に高温多照であつたために、中部以北では発生少なく、後期のまんえんも著しくなかつた。南部では8月の本田浸水や9月の台風の影響で発生がやや多くなつたが、被害は甚しくなかつた。モンガレ病の発生は一般におそく、初期には低調であつたのが、出穂期ごろから急激に進展して意外の多発生となり、とくに中部以北で被害が大きかつた。8月後半～9月の高温、稲の繁茂（多けつ品種）、多肥条件および初期防除の不十分などに原因すると考えられる。ウイルス病では

イシユク病がやや多くなった県が2~3あり、オウイ病は全般に多くて後期発病も目立つた。これには春のひこばえが多かったこと、早期稲での多発などの影響が考えられる。シマハガレ病は平年並~やや多い発生で、中部以北では後期発病が多かった。ヒメトビウソカの第2回成虫が多かったことが多発の原因の一つとしてあげられる。クロスジイシユク病は少なかつた。その他の病害では、ゴマハガレ病(福岡, 大分), シンガレンセンチュウ病(大分)が多発した。

〔農作概況〕

水 稲

作付概況

昭和39年産水稻の作付面積は、第1表のとおりで、九州で424,500haが、作付された。これは前年より、1,800haの減少となり、主として都市近郊における宅地ならびに工場用地、道路等への転用によるもので、福岡県では800haに達したが他県は200ha内外に止つている。

第1表 九州ならびに県別収穫量

	作付面積 (100ha)	10アール	収穫量 (100t)	38年収穫	作況指数 (平年対比)
		当収量 (kg)		量との差 (100t)	
全 国	31,250	396	123,610	▲1,680	99
九 州	4,245	384	16,320	▲ 860	102
福 岡	945	447	4,224	▲ 74	114
佐 賀	551	464	2,558	▲ 55	108
長 崎	320	341	1,092	▲ 107	102
熊 本	760	415	3,155	▲ 19	103
大 分	538	386	2,075	▲ 3	105
宮 崎	490	288	1,410	▲ 152	91
鹿 児 島	641	282	1,809	▲ 599	81

▲は減を示す。

第2表 水稻全国、九州の被害種類別の被害率と平年差

	総 数	気 象 災 害						病 害			虫 害		
		総 数	風 水 害	干 害	冷 害	総 数	イモチ	紋 枯	総 数	三化螟虫	ウンカ		
												%	%
全 国	本年 13.8 平年差 2.1	8.0 2.9	3.9 ▲0.3	0.9 0.5	2.7 2.3	4.7 ▲0.2	2.6 ▲0.2	1.3 0.3	1.0 ▲0.7	0.5 ▲0.7	0.3 0.0		
九 州	本年 16.4 平年差 2.9	7.9 2.6	6.0 2.2	1.7 0.3	0.0 0.0	7.0 1.7	2.7 0.4	2.5 1.3	1.4 ▲1.4	0.8 ▲1.0	0.4 ▲0.2		

▲印は減を示す。

第3表 水稻県別被害面積および被害量

	総 数		気 象 災 害		病 害		虫 害	
	被害面積 (100ha)	被害量 (100t)	被害面積 (100ha)	被害量 (100t)	被害面積 (100ha)	被害量 (100t)	被害面積 (100ha)	被害量 (100t)
福 岡	2,099	306	243	71	1,487	199	365	36
佐 賀	1,384	217	124	46	1,050	150	203	18
長 崎	665	181	170	108	335	49	160	24
熊 本	2,161	389	411	127	1,434	230	306	31
大 分	961	235	351	156	425	53	184	25
宮 崎	1,848	481	445	260	1,012	179	389	42
鹿 児 島	2,325	807	576	500	1,311	254	421	51

なお全国的傾向として近郊農村から工業地帯への労働力の吸収が著しく、農業労働力の量ならびに質の低下に対処し生産性の向上をはかる意味から、近年水稻の直播栽培の要求が高まっているが、本年ようやく、2,000haに達した。

風水害回避を主目的とする早期栽培は前年を頂点として頭打の傾向にあつて40,000haを僅かに割つて作付総面積の9%程度となり、宮崎、鹿児島両県で、その70%近くをしめている。

作柄概況

梅雨期には局地的に集中豪雨はあつたが全般に多照で前作春の収納も早く終了し、用水も確保されたので田植えは順調に進み平年より2~3日早かつた。

7月始めから盛夏的炎天つづきで最高気温30°Cを越す日が移かつたので、分けつが発生が早く増加も順調で穂数は充分確保された。7月の雨量は平年の1/2~1/3で極端に少なく、このため天水、ため池依存の山間、山麓地帯では用水の不足をきたし、応急の干害対策が構じられた。しかし8月始めの台風11号、下旬の台風14号は北部九州では干害の解消に大いに役立つ結果となつたが、南部九州では暴風雨による被害が発生した。

出穂期ならびに登熟の前半期は好天がつづき、9月中旬まで残暑がきびしかつたため登熟の初期進度は促進されたが、紋枯病の上位葉への伸展が意外に早く、急激に蔓延して、近年稀な被害となり、作柄が当初の子想より低下してきた。

9月24日大隅半島に上陸した台風20号は大型の風台風で九州南東部を斜断し、鹿児島、宮崎県下に大きな

被害をあたえたが、北部では大したえいきようはなかつた。

登熟中期には低温、後期には高温と、気温の変化が著しく紋枯病以外の病害の発生も比較的多かつたので粒張りが悪く、単位面積当りの穂数、もみ数が多かつた割合に収量が上らず秋落型の生育に終つた。

しかし北部の福岡、佐賀両県では10a当450kg内外の収量をあげ、平年対比114%、108%を示す豊作となり北部ほど作柄が良かったが、この大きな要因は北部で台風が軽かつたことと肥沃地の多収栽培向品種として育成された、ホウヨ 系統の短稈多けつ型の導入普及があげられ、登熟期の台風にも倒伏が少なく、病虫害防除を容易にし、登熟の低下を最少限に止めた点は特記すべきことである。

麦 類

作付概況

ことしの春の作付面積は別表のように全国、九州とも前年に引きつづいて減少している。これは主として兼業農家の増加による労力不足と、近年登熟期間の長雨で凶作となって収益性が低下したことが大きい原因と思われる。これを麦別についてみると、裸麦と大麦の減反は数年前から現われていたが、本年は小麦に及んできたことが注目されると共に、ビール大麦の作付が九州では増加している点である。

昭和39年産麦類作付面積 (全国・九州)

麦別	作付面積		同前年比較(対差)	
	全 国	九 州	全 国	九 州
	100ha	100ha	100ha	100ha
小麦	4,929	1,437	▲ 726	▲ 188
大麦	1,617	11	▲ 300	▲ 4
ビール大麦	1,128	196	▲ 111	▲ 15
裸麦	2,073	875	▲ 418	▲ 114
四 麦 計	9,747	2,519	▲ 1,550	▲ 291

▲印は減少

作柄概況

播種期が天候に恵まれて、発芽ならびに初期の生育は促進され平年より進んだ状態で越年した。1月に入っても気温は依然高目で、特に中旬は、平年より3～5°C高かつたので、生育は更に進んで幼穂の形成始期は全般に10日ほど早まり、莖数の増加も早期に停止する結果になった。しかし2月が寒冷で冬が逆もどりした状態の気象条件であつたため、この間の生育は抑制されて進度も平年並となつた。

3月は順調で日照も多く土壌も乾燥して地下部の発

育充実に好都合であつたが、下旬から4月中旬まで異常高温がつづき、最高気温で25°C以上の初夏の暖かさとなつたので、出穂が早まり多雨少照のため大麦類に不稔現象が出て北部ならびに中部のビール大麦の不稔による減収は大きかつた。その原誘因について検討された点を要約すれば

1. 出穂前後の異常高温による植物体の栄養の不均衡にもとづく花粉粒の障害で、雄性不稔の一種である。
2. 生育初期の暖冬による地下部地上部の生育の不均衡が上記障害を助長している。
3. 出穂期間中の連続降雨による過湿にもとづく授精機能の低下もあづかつている。

登熟期間では初期が高温多照に恵まれていたが、中期以降多雨か照で多湿状態がつづいたので赤かび病が逐次ひろがり、加えて湿害による葉の枯れ上りが急速に進んで、全般に枯れうれ状態を呈したので粒の肥大は不良となり、九州地域の作況指数は小麦75%、裸麦53%、大麦67%、ビール大麦58%で前年の大凶作に続いて作柄は不良となつた。なお県別では長崎、宮崎の二県が半作以下となつて減収が甚しかつた。

昭和39年産麦類県別10a当収量並作況指数

県別	小 麦		大 麦		ビール大麦		裸 麦	
	10a当	作況	10a当	作況	10a当	作況	10a当	作況
	収量	指数	収量	指数	収量	指数	収量	指数
	kg	%	kg	%	kg	%	kg	%
福 岡	211	80	127	73	122	46	152	64
岡 賀	192	78	139	57	170	65	137	52
佐 賀	168	64	90	48	106	46	111	41
長 崎	141	69	150	79	112	49	127	59
熊 本	218	84	149	75	69	25	196	71
大 分	84	51	113	58	87	43	48	27
宮 崎	114	74	81	60	133	73	94	56

陸 稻

早期栽培では発芽と初期生育は良好であつたが、6月中下旬の低温、日照不足のため莖葉は軟弱となり生育は停滞した。7月に入り紋枯病が多発し、それ以降も早ばつのため穂数が減少した。南九州では早生種は台風11号のため倒伏が甚しかつた。一般に成熟期は前年より5～10日おくれ、収量は前年にくらべ3割前後劣つた。

普通期栽培では発芽と初期生育は良好であつたが、分けつ盛期から出穂期を通じ早ばつ状態に経過した地域が広く、総じて穂数、着粒数が減少し、収量も平年より5%減少した。

甘 藷

育苗期間中の気象は3月後半、5月前半は平年と大差なかつたが、4月は各地とも異常な高温が続き、加えて多雨寡照であつた。このため苗は徒長気味となつた。植付けは苗の伸長が良好であつたので、早目に行なわれ各地とも適当な降雨があつたので、活着ならびにその後の生育はほぼ順調であつた。しかし7月に入り1部の地帯を除き全般に高温寡雨多照がつづき、8月始めの台風11号、下旬の台風14号が来襲するまで早ぼつ状態がつづいた。このため、地上部の生育は相当抑えられ、塊根の形成も遅延した。その後は台風のもたらした降雨で早魁状態が解消して生育は回復し10月下旬頃まで比較的好天が続いたので、塊根の肥大ならびに澱粉の蓄積は著しく促進された。9月下旬台風20号の被害は南九州の1部にみられたが、全体的には、軽微であり、また病虫害、初霜の被害も平年と大差なく、大被害を蒙つた所はなかつた。

これを要するに、本年度甘藷作の育苗ならびに植付けは順調であつたが、前半の早ぼつが地上部の生育を抑え塊根の形成を遅延させたので、これが最終的に収量まで影響して、収量は平年に比し約1割程度の減収となつた。

しかし、澱粉歩留りは後半の好気象条件により1～1.5%程度高かつた。

馬 鈴 薯

春 作 :

植付け時2月下～3月上旬の気象は、全般的にやや低かつたが、その後4月に入り高温となつたので萌芽が早く、晩霜害もなく、5～6月は高温寡雨多照の好気象条件がつづいたので、生育は一般にきわめて良好に経過した。病害の発生も少なかつたので、平年に比しいも収量が多く、澱粉価も高かつた。

秋 作 :

植付け時9月の気象は平年に比し、気温が高く乾燥気味であつたので、萌芽は全般的に相当の遅れを来しまた欠株が多発した。その後の生育は好天が続いたので良好となつたが、初期生育のおくれのためいも収量ならびに澱粉価は平年作をやや下廻つた。

大 豆

夏 大 豆 :

4月は高温適湿であつたので、発芽は全般的に良好で、初期生育も順調であつた。しかし、生育中期には低温障害が見られ、後期はまた早魁で全般に生育は悪く、収量は平年作に比しやや劣つた。

秋 大 豆 :

発芽は良好であつたが、寡雨早魁気味のため茎葉の伸育が一時停滞した。しかし、中期以後は漸次回復した。台風14号のため早生種の被害は著しかつたが、晩生種の収量は平年作程度であつた。

な た ね

九州各県の39年産のナタネの収量は2年つづきの稀有の低収を示した。その原因は開花期頃から落花終にかけての長雨によるようである。生育の初期における気温は平年並みかやや高目に経過し、これがため、ナタネの生育の前期はやや促進された傾向を示し、一部地域には徒長の傾向すらみられた。しかし、4月初めからの長雨と4月下旬にみられた倒伏とは菌核病の激発を招き収量品質共甚大なる被害を受けた。

飼料作物・家畜

38年の秋播き飼料作物は、暖冬のため冬期間の伸長よく寒害も少なかつたが、さらに4月の高温、多雨によつて順調に生育し、イネ科、マメ科牧草とも収量が多かつた。また5月の高温、多照は乾草調製にきわめて好適な気象条件であつたため、例年になく多量の良質乾草を収穫できた。しかしながら、マメ科牧草には4月の高温、多雨のため菌核病の発生をみた。

また4月の気象は春播き飼料作物の播種に適し、5月はかなり乾燥したが高温多照がトウモロコシなどの生育に適したこと、梅雨の被害もなかつたことから青刈収量は例年になく多かつた。台風の被害は中部および北九州では少なかつたが、南九州および高冷地のトウモロコシ、とくに実取りとして晩播きものは、ほとんど収穫皆無の被害を受けた。

本年は9月中旬まで比較的高温が続いたため、飼料カブの初期生育はきわめてよく、その後の生育も順調で根部の肥大がよかつた。また、10月は高温でかなりの雨があり、その後の気象条件にも恵まれて秋播き牧草は順調な生育を示した。

本年は家畜伝染病の暴発をみることはなかつたが、一部の地域において低温期に原因不明の牛の伝染性下痢症が発生し、乳量の減少など、乳牛にかなりの被害

を及ぼした。

なお、家畜家禽の飼養頭羽数は増加もしくは横ばいの状態で、卵価の低落を除くと、価格も比較的整調に推移した。

果 樹

本年は、多彩な気象で果樹にも影響の多い年であった。まづ昨年12月に引続いての1月の暖冬で、ウメやビワの開花が促進され、続いてきた2月の低温で幼果の凍死するもの多く、特にウメは甚しい不作の原因となつた。

4月の記録的な高温と多雨により、ミカンでは、発芽、開花が異常に早く、しかも相接近して両者の間に養分の競合が起り、甚しい落果を誘発した。ナシでは4月前半の雨と冷温により交配不十分で結実数が少くなつた。また2月の低温と4月の異常高温などの気象的変調はクリのキクイムシの異常発生をみて、増殖途上にあるクリの栽培に、大恐慌をきたした。

しかし5月の高温晴天は、ブドウの結実には好都合であつた。

7～8月の乾燥はブドウの赤ウレ現象を助長し、ナシ晚三種のアン入り果発生の原因となつた。10～11月の乾燥はミカンの浮皮を少くし、糖分を増す結果となつた。

数回にわたる台風は宮崎、鹿児島などの南九州ではミカンのソーカ、カイヨウなどの病気を多発した。

そ 菜

39年の九州のそ菜は春の異常気象とそれに続く少梅雨と夏の高湿乾燥、秋の少雨乾燥に大きく影響され、また9月下旬の台風20号による東部九州の被害は、宮崎、大分などの鉄骨ハウスに大であつた。すなわち1～2月の寡日照低温は宮崎などのハウス半促果菜の生育も遅らせ、一方やや時季のおそい北部九州の半促は3～4月の高温によつて促進され、とくにキュウリなどは南北の出荷が競合して市価の低落をみた。

トンネル早熟果菜は5月の高温多照、少梅雨など順調な生産を示し、市価は今般的に低調であつたが、これ前年末来のそ菜価格が尾を引いた面もあつたと思われる。

なお梅雨の寡雨は北九州に多い十字花科そ菜を中心とする採種をも安定せしめた。

夏の高湿乾燥は抑制果菜にかなりの影響を与え、株

上りの早期化、果の着果肥大を制約した。

9月下旬の台風は宮崎など九州南部の鉄骨ハウスに甚大な被害をもたらした。ビニールの張つてあるものは全部倒壊し、張つてないものにも被害がみられ、露地抑制果菜、播種当時の葉物状そ菜も大きな被害を蒙つたが、九州西部の被害は殆んどなかつた。

秋には中秋に一時冷気が訪れたが全般的に暖冬かつ乾燥で、前年の暴落にこりた農家の作付意欲の減退と併て秋冬そ菜の市価の高騰を招いた。また秋の乾燥は越冬そ菜の肥効を抑え、これが、年明けと共に肥料の分解に伴う障害をもたらしたそ菜（イチゴなど）もある。全般的に秋の乾燥はそ菜の生育を抑制した。

花 き

1～2月の気温が高かつたためウメは約1週間開花が早く、カノコユリの発芽も例年より早かつた。

3～4月前半は平年より5°Cも高温で、曇雨天が多く、日照が少なかつたため、9月咲キク、秋寒キクは短日の影響をうけ異常花芽分化がみられた。

5～6月は例年より降水量が少なく、アイリスの収穫乾燥が順調に行なわれた。

7～8月は連日多照高温でこのためカーネーションやキクの育苗、挿木には高温障害がみられた。秋播き草花の発芽障害も生じた。しかしその後の生育は比較的順調で病害の発生も少なく生産には大した影響はなかつた。

9月には台風20号によつて鹿児島、宮崎ではハウスの破損、秋寒キクに大損害があつた。

10月以降は平穏で、特に年末には高温のため電照ギクの開花が進み年末に開花が集中した。

茶

一 番 茶

昭和39年は暖い冬がつづき、4月上、中旬の気温は高く、降水量も平年なみが多かつたので、茶芽の伸育は順調に進んだ。特に晩霜被害がなかつたため、摘採期は1～3週間早くなり、早場所も遅場所も一斉に発芽し、また早、中、晩生品種の区別もほとんどなかつたので、工場へ生葉が一時に集まり、製造は大混乱を呈した。そのため収量は10～50%の増収であつたが、品質は低下したものが多かつた。

二 番 茶

5月中、下旬の低温と、発芽生育期間の雨量不足に

より茶芽の伸育は進まず、一番茶後のおくれ芽も多く生育期間が長くなり、園相は、一般に不そろいであつた。摘採期は一番茶についで10~30日早かつたが、収量は増収と減収と地区によつて異なつていた。

三 番 茶

7~8月の気温は平年なみか高温となつたが、生育期間を通じ降水量が少なく早ばつとなつたので、茶芽の伸育は抑制された。しかしその後天候もよくなり、摘採期は1~2週間早く、収量も10~20%の増収であつた。

九州における著名茶産地の摘採期、および10a当た

り収量を示すと次のとおりである。

地 名	一 番 茶		二 番 茶		三 番 茶		
	摘採期	収 量 kg	摘採期	収 量 kg	摘採期	収 量 kg	
枕崎	{昭39	4.18	450.4	5.31	194.4	7.16	274.4
	{昭38	5.4	273.2	6.18	229.5	7.26	86.6
知覧	{昭39	4.24	338.4	6.17	454.4	7.28	369.1
	{昭38	5.15	328.6	6.29	253.0	8.8	228.6
川南	{昭39	5.1	393.0	6.16	464.0	7.21	371.0
	{昭38	5.22	424.0	6.24	302.0	7.29	329.0
熊本	{昭39	4.24	452.6	6.16	343.0	7.28	356.0
	{昭38	5.13	283.0	7.12	310.0	8.21	—
嬉野	{昭39	4.27	486.6	6.29	431.2	8.7	505.6
	{昭38	5.20	585.4	7.6	550.8	8.22	483.6
八女	{昭39	4.26	339.0	6.15	285.0	7.23	430.0
	{昭38	5.12	327.8	6.24	223.4	7.26	194.8